

# 國學院大學學術情報リポジトリ

日本語リテラシー教育に求められる指導内容：  
社会と学生のニーズ分析をもとに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 家入, 博徳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000783">https://doi.org/10.57529/00000783</a>

# 日本語リテラシー教育に求められる指導内容

## —— 社会と学生のニーズ分析をもとに ——

家 入 博 徳

### キーワード

日本語リテラシー教育 日本語運用能力 大学生 初年次教育 国語に関する世論調査

### はじめに

近年、高等教育機関（大学）では、初年次に基礎的な日本語の運用を扱う講座が盛んにつくられている。いわゆる、大学での初年次教育の一環であるが、これは高等学校教育から大学教育への円滑な移行を目的としている。そして、その中心的なものとして日本語リテラシー関連科目が置かれている。

設置の背景には「ゆとり教育」の導入といった学習指導要領改定による「国語力低下」の問題との関わりが指摘されている<sup>(1)</sup>。学習指導要領改定による教科時数減少が国語力を低下させたとの安易な結びつけはできないが、石原千秋氏によると改定後の国語教科書のレベルは低下しているという<sup>(2)</sup>。

また、高等学校の国語は、その学習体験を大学で活かすことが難しい状況にあることも要因として考えられる。高等学校では読解を中心とした学習を重視する一方、大学では論述を中心とした学習を重視する。これは、どの学部や学科に所属したとしても同様である。

したがって、学生には大学が求める日本語運用能力を高める必要があり、大学には一定の日本語運用能力のある学生を育てることが求められているのである。

このような背景の下で、各大学において日本語リテラシー関連の授業が行われている。日本語リテラシー教育に関する論文も近年散見するようになったが、その多くは各大学で

の実践報告であり、「初年次に必要な日本語運用能力とは何か」については指導者個々において解釈は異なり、授業効果も未知数である。また、学生がどのような日本語およびその運用に関心があり、円滑な学習へと導入ができるのかといった、学習に対するモチベーションに関する問題もいまだ明らかとなっておらず、授業運営は手探り状態が続いている。

したがって、どのような日本語運用が学生にとって重要なのか（社会から求められているのか）を客観的に考えることが必要ではないだろうか。また、学生の学習に対するモチベーション低下を抑制するためにはどのような授業運営を行えばよいのかを考えることも必要である。

そこで、本論ではまず、日本語リテラシーが現在どのように位置づけられているのかを概観し、現状を把握する。そして、学生の日本語およびその運用に対する意識の把握を目的として実施したアンケート結果から、学生がどのような日本語およびその運用に関心があるのか（ニーズ）を分析し、授業への円滑な導入および授業効果を上げる項目とは何かについて考えてみたい。さらに、「国語に関する世論調査」の結果を併記し、学生がどのような日本語運用を求められているのか（ニーズ）も同時に考えてみたい。

## 1 初年次教育における日本語リテラシー教育の位置付け

中央教育審議会大学分科会制度・教育部会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（平成20年3月25日）では初年次教育を、

「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」として説明される。（P35）

とし、高等学校から大学への円滑な移行のための教育プログラムとして定義している。なお、具体的なプログラムとして、同報告書には、

我が国の大学の、初年次教育においては、「レポート・論文などの文章技法」、「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」、「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」、「学問や大学教育全般に対する動機付け」、「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」、「図書館の利用・文献検索の方法」などが重視されている。（P35）

が挙げられている。この中央教育審議会の報告では、「レポート・論文などの文章技法」が最初に列挙されている。これは日本語リテラシー教育と深く関わる項目である。列挙の

順番が必ずしもその重要度合いと等しいとは限らないが、初年次教育では日本語運用が重要視されていることが考えられる。また、同報告書に挙げられている「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」も言語活動例として『高等学校学習指導要領（国語）』に記されていることから、日本語リテラシー教育と関わる項目であると考えられる。したがって、初年次教育の中でも日本語リテラシー教育は重要視された存在であると言える。

なお、初年次教育が近年重要視されてきた背景には、同報告書に、

入学者選抜をめぐる環境変化、高等学校での履修状況や入試方法の多様化等を背景に、入学者の在り方も変容しており、総じて、学習意欲の低下や目的意識の希薄化などが顕著となっている。大学教員を対象とする調査によれば、6割を超える教員が、「学力低下」を問題視し、特に論理的思考力や表現力、主体性などの能力が低下していると指摘している。また、大学1年生を対象とした調査結果によれば、大学の授業に「ついていけない」、大学で「やりたいことが見つからない」等の回答が相当の割合を占めている。少子化等を背景に、従来であれば合格できなかった低学力層も進学するようになってきている。高等学校と大学それぞれが、自らの責任の下、適切な「出口」と「入口」の水準を設定し、的確に運用しているのか、改めて見直しが求められる。

(P34)

とあるような、学生の学習に対するモチベーションの問題や学力低下の問題がある。

このような状況の中、多くの大学で初年次教育が行われている。その導入状況について、「大学における教育内容等の改革状況について」(文部科学省 平成21年3月31日)によると、初年次教育を導入している大学は平成18年度では501校（国立67校、公立45校、私立389校）、平成19年度では570校（国立74校、公立54校、私立442校）と上昇している。また、具体的な学習内容としては、「レポート・論文の書き方など文章作法を身に付けるプログラム」を実施している学校が最も多く、以下「プレゼンやディスカッションなどの口頭発表の技法を身に付けるプログラム」、「学問や大学教育全般に対する動機付けを身に付けるためのプログラム」、「図書館の利用・文献検索の方法を身に付けるプログラム」、「情報収集や資料整理の方法を身に付けるプログラム」が続いている。

中でも、やはり日本語リテラシーに関わる項目が上位を占めており、その重要性から多くの大学が初年次教育として実施しているものと思われる。

## 2 日本語リテラシー教育の動向

前節で見たように、多くの大学では初年次教育で「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるプログラム」や「プレゼンやディスカッションなどの口頭表現」といった日本語リテラシーに関わる項目、さらには高等学校の国語教育の内容に含まれるものを実施している。

高等学校での国語教育のうち、すべての生徒に履修させる必修科目は「国語表現Ⅰ」もしくは「国語総合」である。中でも、多くの高等学校で行われている「国語総合」は、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の3領域1事項から内容を構成し、総合的な言語能力を育成する科目である。学習指導要領では、このように多方面から国語力の向上を目指すものであり、その中に、「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるプログラム」や「プレゼンやディスカッションなどの口頭表現」に関わる項目は含まれている。しかし、実際の授業では、文学的な文章の詳細な読解を中心に行われる傾向がある<sup>(3)</sup>。したがって、学生と大学が求める日本語運用能力との間に差異ができ、日本語リテラシー教育が現在多くの大学で行われているのである。

筒井洋一氏によれば<sup>(4)</sup>、日本語表現法科目を最初に体系的に理論づけたのは学習院大学であり、すでに1980年代から教科書制作を行っていたという。なお、同時期に桜美林大学でも同様な動きがあった。その後、1990年代前後において大学における日本語リテラシー関連科目の設置が広がり、1999年を境にその数は一気に増加した。また、国立大学においても教養科目再編の中、日本語リテラシー関連科目の設置が始まる。中でも、富山大学は先駆けであり、選択必修で実施された。さらに、京都精華大学は2006年度の「特色ある大学教育支援プログラム」に「考えるための『日本語リテラシー』教育」で採択されるなど、日本語リテラシー教育の理論と実践を体系的に構築しようとする動きもでてきている。なお、京都精華大学では「日本語リテラシー」の教育目標を以下のように設定している<sup>(5)</sup>。

- ① 「考えながら読む力」の育成
- ② 「考えながら書く力」の育成
- ③ 「他者と社会への関心」の拡大と深化
- ④ 「自立した学習者」への足がかり

これらの教育目標のもとに、主に課題作文を中心とした授業を展開し、さらに日本語能力別クラス編成も行い、きめ細かな配慮のもと授業運営を行っている。

また、いくつかの専門学会の設立も見られる。2005年に日本リメディアル学会、2008年

に初年次教育学会が設立され、情報の共有化が図られている。

このように、効果的な授業運営の模索が行われているものの、新しい分野であるため、いまだ途上過程にあると言える。

### 3 学生の日本語運用意識—アンケート調査をもとに—

このような状況から、本論を著すにあたりまず、学生の日本語およびその運用に対する意識の把握を目的に、学生に対しアンケート調査を実施した<sup>(6)</sup>。さらに、学生のアンケート結果と「国語に関する世論調査」の結果とを併記し、学生がどのような日本語運用に関心があるのかの分析および、社会がどのような日本語運用能力を求めているかの分析を行った。

本節では、この調査結果の分析を通して、効果的な授業項目および学生の学習に対するモチベーション低下を抑制することによる授業への円滑な導入方法を模索したい。

ちなみに、アンケートの実施においては、社会における日本語運用能力の要求をみる資料として、文化庁が毎年行っている「国語に関する世論調査」(平成19年度)の質問項目を使用した<sup>(7)</sup>。そもそも「国語に関する世論調査」の目的は、「日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資する。」であることから、現状の日本人の日本語運用に関する意識を把握できるものと思われるからである。ただし、「国語に関する世論調査」は毎年調査テーマが異なることから、日本語運用に関わりがあると思われる項目(「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるプログラム」や「プレゼンやディスカッションなどの口頭表現」に関わりがあると思われる項目)を取り上げている平成19年度の資料を用いて考察する。

なお、平成19年度の「国語に関する世論調査」の主な目的は、「ほかの人の言葉遣いが気になるか、国語力向上のための課題は何か、また、外国人とのコミュニケーション、外来語、外国語などカタカナ語使用についてどう感じるかなどを中心に、国語に関する一般の人々の意識」であることから、この調査項目の中でも、「日本語運用」と関わりのある項目を取り上げることにする<sup>(8)</sup>。

質問1 「あなたは、ふだん、ほかの人の言葉遣いなどが気になりますか。それとも、気になりませんか。この中から1つ選んで○をつけてください。」

非常に気になる	ある程度気になる	余り気にならない	全く気にならない	分からない
12.3(14.4)	59.6(56.6)	24.6(23.2)	3.5(5.6)	0.0(0.2)
71.9(71.0)		28.1(28.8)		0.0(0.2)

学生の場合、「非常に気になる」と「ある程度気になる」が合計で70%を超えており、普段から他者の言葉遣いを気にしている学生が多い傾向がある。この学生の傾向は文化庁調査とほぼ同様の傾向を示しており、社会一般と意識の差異はないものと考えられる。

「非常に」とまでではないものの、「ある程度」は普段から他者の言葉遣いについて、何かしら気になっている人が多い傾向が窺える。

質問2 「あなたが、ふだんの生活の中で接している言葉から考えて、今の国語は乱れていると思いますか。それとも、乱れていないと思いますか。この中から1つ選んで○をつけてください。」

非常に乱れていると思う	ある程度乱れていると思う	余り乱れていないと思う	全く乱れていないと思う	分からない
7.0(20.2)	67.5(59.3)	18.4(15.1)	0.9(1.1)	6.1(4.3)
74.6(79.5)		19.3(16.2)		6.1(4.3)

学生の場合、「非常に乱れていると思う」「ある程度乱れていると思う」が合計で70%を超えており、普段の生活の中で国語の「乱れ」を感じている学生が多い傾向にある。文化庁調査も同様に80%に迫る人たちが「乱れ」を感じている。したがって、一見学生と社会一般との意識の差異はないものと考えられが、詳細にみると若干異なる。「乱れていると思う」学生の中でも「非常に乱れていると思う」が7%であったのに対し、文化庁調査では約20%であり、強く乱れを感じている学生は文化庁調査に比べ低いことが分かる。学生は「乱れ」を感じてはいるものの、その割合は低い傾向にある。

質問3-1 「(質問2で「非常に乱れていると思う」もしくは「ある程度乱れていると思う」と回答した人) どのような点で乱れていると思いますか。この中から3つまで挙げて○をつけてください。」

あいさつ言葉	18.8	(38.9)
発音やアクセント	11.8	(25.2)
手紙や文章の書き方	20.0	(11.1)
語句や慣用句・ことわざの使い方	31.8	(12.4)
敬語の使い方	57.6	(67.1)
外来語・外国語の多用	7.1	(16.7)
新語・流行語の多用	36.5	(36.4)
若者言葉	58.8	(60.4)
その他	5.9	(0.6)
分からない	1.2	(0.4)

この質問は複数回答形式である。学生の場合、「若者言葉」、「敬語の使い方」がほぼ同様の割合で高く、以下「新語・流行語の使い方」、「語句や慣用句・ことわざの使い方」が続く。

「若者言葉」、「敬語の使い方」、「新語・流行語の多用」については文化庁調査と類似する傾向を示しているが、さらに文化庁調査では「あいさつ言葉」や「発音やアクセント」に対し乱れを感じている傾向がある。一方、学生は「語句や慣用句・ことわざの使い方」や「手紙や文章の書き方」に乱れを感じている傾向がある。

この傾向から、学生は学校教育で習得した知識や文章技法に関心が高く、したがってそれらに関わる項目に敏感に反応し、乱れを感じる傾向があると考えられる。高校を卒業してまだ間もなかったり、大学での文章による提出物の多さが影響しているものと考えられる。一方、社会一般では、日常の会話に関わる項目において乱れを感じている傾向がある。

**質問3-2 「(質問2で「余り乱れていないと思う」もしくは「全く乱れていないと思う」と回答した人) 乱れていないと思うのはどのような理由からでしょうか。この中からあなたの考えに最も近いものを1つだけ挙げて○をつけてください。」**

正しい言葉遣いをしている人が多いと思うから	0.0	(7.8)
多少の乱れがあっても、根本的には変わっていないと思うから	31.8	(29.7)
言葉は時代によって変わるものだと思うから	59.1	(39.1)
いろいろな言葉や表現がある方が自然だと思うから	9.1	(18.8)
その他	0.0	(0.3)
分からない	0.0	(4.4)

学生の場合、「言葉は時代によって変わるものだと思うから」が最も多く、全体の半数以上を占める。以下「多少の乱れがあっても根本的には変わっていないと思うから」、「いろいろな言葉や表現がある方が自然だと思うから」が続く。この傾向は文化庁調査と同様の傾向である。この調査結果の中でも、学生の場合、「言葉は時代によって変わるものだと思う」人が約60%と他の回答に比べ高い割合を占めていることは注目すべきであろう。

つまり、「乱れ」＝「間違った使用」と考えるのではなく、「時代の変化による使用」であり、したがって「間違った使用」ではないと考えているのではないだろうか。質問2で「非常に乱れていると思う」が文化庁調査に比べ低い傾向にあったのも、「乱れ」か否かといった二者択一では「乱れ」と答えるものの、それを「間違った使用」と同等とは考えていない可能性がある。また、「正しい言葉遣いをしている人が多いと思うから」と考える人は文化庁調査では約8%存在するのに対し、学生は一人もいなかった。学生は「乱れていない」と思いながらも、それは「正しい」使い方をしてと同様ではなく、「変化」と捉えている傾向が考えられる。

質問4「あなたは、これからの時代の言葉遣いはどうあるべきだと思いますか。ここに挙げた意見の中から、特に大切だと思うものを2つ選んで○をつけてください。」

話す人の主張を論理的に伝えるものであるべきだ	33.3	(18.0)
話す人の気持ちを、分かりやすく飾らずに伝えるものであるべきだ	39.8	(52.5)
相手への気配りを表すものであるべきだ	62.4	(56.5)
話す人の品の良さを表すものであるべきだ	19.4	(13.2)
人間関係を滑らかにするものであるべきだ	40.9	(41.6)
分からない	4.3	(2.3)

この質問は二答形式である。学生の場合、「相手への気配りを表すものであるべきだ。」が最も高く、以下「人間関係を滑らかにするものであるべきだ。」「話す人の気持ちを、分かりやすく飾らずに伝えるものであるべきだ。」と続く。この学生の傾向は文化庁調査と類似しており、社会一般と意識の差異はないものと考えられる。

質問5「日本人の国語力について、あなたは社会全般においてどのような点に課題があると思いますか。この中から3つまで選んで○をつけてください。」

漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識	23.7	(28.0)
語句や慣用句等の知識	23.7	(10.8)
敬語等の知識	46.5	(42.1)
論理的に考える能力	20.2	(15.6)
説明したり発表したりする能力	38.6	(29.7)
相手の立場や場面を認識する能力	13.2	(31.6)
他人の話を正確に聞く能力	26.3	(36.8)
分析して要点をつかむ能力	21.1	(9.8)
考えをまとめ文章を構成する能力	28.9	(22.7)
言葉で人間関係を形成しようとする意欲	11.4	(13.4)
日本の伝統的な文化やものの見方	10.5	(12.2)
その他	0.9	(0.3)
課題になる点は特にない	1.8	(1.2)
分からない	1.8	(6.7)

この質問は複数回答形式である。学生の場合、「敬語等の知識」と回答する人が一番多く、以下「説明したり発表したりする能力」、「考えをまとめ文章を構成する能力」、「他人の話を正確に聞く能力」、「漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識」、「語句や慣用句等の知識」が続く。

敬語については、上述の国語の乱れに関する質問3-1の結果にもあるように、課題と考える人が最も多い。文化庁調査も学生と同様「敬語等の知識」と回答する人が一番多い。つまり、敬語の知識及び使用については、学生は社会一般と同様、特に考慮すべき課題であると考えている。

また、調査結果を見ると、学生の場合、文化庁調査とは異なり、「説明したり発表したりする能力」、「考えをまとめ文章を構成する能力」といった発信技法や文章技法、さらには「漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識」、「語句や慣用句等の知識」といった漢字や慣用句など一定の言語知識に課題を感じている傾向がある。この傾向は、質問3-1で考えられた高等学校、大学といった直近の学校教育が影響しているものと考えられる。

**質問6 「日本人の国語力について、あなた自身は、どのような点で自信を持ってませんか。この中から3つまで選んで○をつけてください。」**

語句や慣用句等の知識	27.2	(18.9)
敬語等の知識	36.0	(25.6)
論理的に考える能力	27.2	(17.7)
説明したり発表したりする能力	52.6	(32.5)
相手の立場や場面を認識する能力	5.3	(10.4)
他人の話を正確に聞く能力	17.5	(13.3)
分析して要点をつかむ能力	23.7	(15.5)
考えをまとめ文章を構成する能力	36.0	(29.8)
言葉で人間関係を形成しようとする意欲	14.9	(12.5)
日本の伝統的な文化やものの見方	7.9	(17.0)
その他	0.0	(0.5)
自信を持ってない点は特にない	1.8	(6.1)
分からない	2.6	(5.0)

この質問は複数回答形式である。学生の場合、「説明したり発表したりする能力」と回答する傾向が特に高い。これは、社会全般の国語力の課題について聞いた質問5の結果とは異なっている。社会全般の国語力の課題では、「敬語等の知識」が最も高かったが、学生が自分自身の国語力を考えた場合、「説明したり発表したりする能力」といった発信技法に自信を持ってない学生が最も多い。以下、「敬語等の知識」、「考えをまとめ文章を構成する能力」、「語句や慣用句等の知識」、「論理的に考える能力」が続き、知識や文章技法、言語知識に自信が持てないと回答する傾向が高い。これも前質問同様、学校教育が影響しているものと考えられる。

質問7「あなたは、今後、あなた自身の国語力を向上させていくために、どのようなことをしたいと思いますか。この中から幾つでも挙げて○をつけてください。」

もっと読書に親しむようにする	75.4	(61.1)
言葉に関する市民講座などで勉強する	1.8	(6.6)
話し方教室やスピーチコンテストなどを聞いたり、出場したりする	10.5	(8.2)
書道、俳句、短歌などに親しむようにする	14.0	(13.4)
質の高い朗読や演劇に親しむようにする	12.3	(12.8)
手引書などを参考にして、正しい敬語や言葉遣いを心掛ける	39.5	(30.0)
基準に従って文字や文章を書くようにする	30.7	(22.0)
できるだけまめに手紙や日記などを書くようにする	26.3	(30.7)
言葉に関するシンポジウムなどに参加し、識者の意見を聞く	6.1	(9.3)
その他	3.5	(1.0)
特にすることはない	1.8	(12.8)
分からない	1.8	(3.2)

この質問は複数回答形式である。学生の場合、「もっと読書に親しむようにする。」と回答する人が一番多い傾向にある。これは文化庁調査と同傾向であり、読書により国語力の向上が図れると考える人が多いことが分かる。以下、「手引書などを参考にして、正しい敬語や言葉遣いを心掛ける。」、「基準に従って文字や文章を書くようにする。」が続く。これらの傾向も、文化庁調査と同傾向であると言える。

以上の結果から、学生の場合、社会全般に対しては「敬語等の知識」に課題があると考えられる人が多く、一方自分自身の課題としては「説明したり発表したりする能力」、「考えをまとめ文章を構成する能力」、「漢字や仮名遣い等の文字や表記の知識」、「語句や慣用句等の知識」といった発信技法や文章技法、日本語知識といった学校教育に関わりのある事項を挙げる学生が多い傾向がある。

また、自身の国語力向上に「読書」を挙げる学生が多いものの、「正しい敬語や言葉遣い」や「基準に従って文字や文章を書く」ことへの関心も高いことから、これらの傾向を授業に活せる可能性がある。

## おわりに

本論では、社会がどのような日本語運用能力を求めているのか、また、学生がどのような日本語およびその運用に関心があるのかの調査・分析を試み、その結果をもとに学生の授業への円滑な導入および授業効果を上げる項目を考察してきた。

社会においては、「敬語等の知識」習得への要求が高く、「他人の話を正確に聞く能力」、「相手の立場や場面を認識する能力」、「説明したり発表したりする能力」といったコミュニケーションスキルの習得を要求している傾向があった。これは、社会が対人関係を重視してい

ることが考えられ、それに適応できる日本語運用能力の習得を重視する傾向と言えよう。したがって、これらの項目を取り入れた授業展開を今後重視する必要がある。

一方、学生の場合、社会全般に対しては「敬語等の知識」に課題があると考えer人が多いものの、発信技法や文章技法、日本語知識に対し、社会全般および自分自身の課題を見出す学生が多い傾向がある。これは、学生が学校教育で習得した知識や文章技法に関心が高い傾向にあるとすることができる。ということは、学生は高校や大学といった学校教育を通して培った知識や技法を伸ばしたいと考えており、それらを用いながら授業展開をすることにより、学生の授業に対するモチベーション低下を抑制、さらには維持、向上できるのではないだろうか。

今後、さらに詳細な分析やデータの蓄積が必要ではあるものの、これらの傾向を何らかの形で授業に活かすことによって、効果的な授業運営へとつながるものとする。

#### 注

- (1) 石原千秋氏『国語教科書の思想』ちくま新書 2005年10月
- (2) 注1と同
- (3) 「読解力向上プログラム」文部科学省 2005年12月
- (4) 『言語表現ことはじめ』(ひつじ書房 2005年2月) なお、筒井氏は日本語表現科目と述べられているが、これは本論の日本語リテラシーとはほぼ同様の科目と考えられる。
- (5) 野口勝三氏「大学における日本語リテラシー教育—対話関係を中核とした「考える」の実践」『日本語学』第28巻第2号 明治書院 2009年2月
- (6) 稿者が勤務する大学において114名から回答を得た(國學院大學53名【2012年4月11日実施】、都留文科大学61名【2012年4月13日実施】)。また、アンケートの質問事項は、平成19年度「国語に関する世論調査」において、日本語運用と関わりのあると思われる項目を取り上げたものである。
- (7) 「国語に関する世論調査」はインターネットでも見られるが、質問事項は冊子本(ぎょうせい 2008年8月)のみで確認できる。
- (8) 以下、質問事項の数字は「本調査(文化庁調査)」で示し、単位は%である。